

PRO MUSICA NIPPONIA



日本音楽集団

第136回◆連続定期演奏会
創立三十周年記念・秋の総合定期



津田ホール

第1夜 1994年11月16日水

第2夜 1994年11月17日木

〔主催〕日本音楽集団

〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302

TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033

〔制作協力〕奈良音楽事務所

1. 春三題 (1977年)

[箏] 花房はるえ [三味線] 太田幸子

2. 絵馬一尺八とピアノによる(1972年)

[尺八] 坂田誠山 [ピアノ] 志村 泉 (客演)

3. 夏の一日 (新作初演)

[笛] 西原貴子 [尺八] 藤崎重康
 [三味線] 坂口美香 [琵琶] 石田さえ
 [二十絃箏] 熊沢栄利子 [十七絃] 大島菜穂子
 [打楽器] 前田文男

～休憩～

4. 尺八協奏曲 (1978年)

[尺八独奏] 宮田耕八郎
 [笛] 西原貴子 [尺八] 藤崎重康
 [三味線] 坂口美香 [琵琶] 石田さえ
 [箏] I 熊沢栄利子 II 桜井智永 [十七絃] 大島菜穂子
 [打楽器] 黒坂 昇・前田文男
 [指揮] 田村拓男

5. 二胡協奏曲 (改定初演)

[二胡独奏] 姜 建華 (客演)
 [笛] 竹井 誠
 [尺八] I 藤崎重康 II 添川浩史 III 米澤 浩
 [琵琶] 石田さえ
 [箏] I 花房はるえ II 桜井智永 [十七絃] 熊沢栄利子
 [打楽器] 黒坂 昇・望月太喜之丞
 [指揮] 田村拓男

客演者プロフィール

姜 建華 (二胡)

中国、上海に生まれる。10才から二胡を学び、13才から海外での音楽活動を開始、欧米、東南アジアなどを舞台に演奏活動を行った。78年、指揮者小澤征爾に見出され、アメリカのタングルウッド音楽祭に出演、更にボストン交響楽団、サンフランシスコ交響楽団と共演。86年サントリーホールの特落しに出演、88年カザルス・ホールでリサイタルを開く。新日本フィル、東京フィル、新星日本交響楽団など、オーケストラとの共演は数多い。

志村 泉 (ピアノ)

東京に生まれる。東京芸術大学・大学院卒業。松原緑、伊達純、M.ムンツに師事。大学院在学中、クロイツァー賞受賞。1979年から、林光の作品を多く初演するなど、現代日本音楽作品を積極的に取り入れたプログラムで数々のリサイタルを行い、いずれも好評を得る。とくに1987年、林光、一柳慧、間宮芳生の三氏に作品を委嘱したりサイタル「志村泉による三人展」は絶賛を博した。1988年第6回中島健蔵賞を送られる。

春三題

1. 若草 2. 陽炎(かげろう)・3. 花吹雪

春によせる三つの心象的なスケッチです。各章ともにそれぞれ題名がついていますが、いわゆる描写音楽ではありません。四季の変化に富んだ日本。特に日本の春は急速にやってくる北国の春と違い、おだやかで心もなごむものです。

しかしそのなごやかさの中にも、ささやかな新しい生命の誕生と躍動が私たちに生きていることの喜びを感じさせます。地唄三味線と箏の二重奏という伝統の土壌に深く根をおろした組合せをとりながら、従来の手事とは異なったアングルから作曲者の春への思いが歌われています。

なお、この曲は〈森の会〉の委嘱により作曲され、同会の第18回定期演奏会で三味線・沢井忠夫、箏・沢井一恵で初演されました。

「絵馬」ピアノと尺八による

絵馬とは日本に古く伝わる、神仏に祈願し恩返しへの印として奉納された馬の絵の額のことです。この曲は三つの部分からできており、全曲はこのような形でしか自分の願望を表現できなかった時代の祈りや願いの心で統一されています。

1972年、宮田耕八郎の委嘱で作曲され、同年宮田耕八郎リサイタルで初演されました。

夏の一日

1. 序曲 2. トレッキング 3. ほたる狩
4. 筏あそび 5. 終曲

「冬の一日・パート2」「秋の一日」につづく、日本の四季シリーズの一つ、夏の部です。

今夜のプログラムに寄せて

昨年春につづいての私の作品特集です。今回は1972年の「絵馬」から新作の「夏の一日」にいたる22年間に作曲した5曲が演奏されます。「夏の一日」をのぞくいずれの作品も、当時の私にとっては新しい編成によるものであり、その内容とアンサンブル技法に夢を託した作品です。

「春三題」の中棹三絃では、この楽器の持ついぶし銀のような魅力に引きつけられ（今回は細棹三味線により、軽快なはやかな春を画きます）、また「絵馬」では尺八とピアノの二重奏の中にそれぞれの個性の主張

子供の目からみた楽しい夏の一日の思い出を、笛・尺八・三味線・琵琶・二十絃箏・十七絃・打楽器の合奏にのせて画いてみました。

親しみやすいメロディーとユニークなリズムが邦楽器の独特な音色と一体になって、楽しい夏の日をかなでて行きます。

尺八協奏曲

歌物、語り物を中心に発展してきた日本の音楽の中で、尺八は器楽としてその独自の道を歩んできました。この深い伝統を背負った尺八を用いて現代の作曲家はさまざまなイメージをもって挑戦してきました。この曲は現在まで書き続けてきた作曲者の尺八観の延長線上にあるもので、邦楽器群との交流の中でイメージする尺八の魅力をさらに拡大するよう書かれています。なお、このカデンツァは宮田耕八郎によるものです。

1978年、日本音楽集団第48回定期演奏会〈尺八演奏者特集〉のために書かれ、編成は独奏尺八と、合奏群は、笛、尺八、三味線、琵琶、箏2、十七絃、打楽器2です。

二胡協奏曲

1983年第19次海外公演が北京と上海において行われた際、中国中央民族楽団との共演曲として「寿歌(ほぎうた)」が作曲されました。その時、作曲者にとって最も印象に残った楽器が二胡でした。哀調を帯びた中にもマイルドな趣を含んだ表現の豊かさ、そして速いテンポを自由に弾きこなせる運動性などの魅力溢れるこの楽器の第一人者、姜建華さんの名演を得て生まれた作品です。

1993年 第128回定期演奏会で初演、編成は、二胡独奏、笛、尺八3、琵琶、箏2、十七絃、打楽器2です。

長沢勝俊

と協調に重点をおいたものです。

二つの協奏曲では「尺八」と「二胡」によるヴィルトゥオーソ的な技法と集団のアンサンブルとの協奏と競奏に、また新作「夏の一日」では7人編成の中で豊かな音色と子供の世界をさわやかなタッチで画いたものです。

日本音楽集田の歩んできた道をしっかりと見すえ、これからも必ず歩み続けるであろうこの道に、大きな可能性を信じ進み続けたいと思っています。

1. 新千鳥の曲 (新編曲・日本初演)

秋岸寛久／尾崎太一 編曲

[笛] 西原貴子 [尺八] I石田忠史 II加藤秀和
[細棹三味線] 工藤哲子 [琵琶] 田原順子
[箏] I山田明美 II城ヶ崎美保 [十七絃] 大泉一美
[打楽器] 尾崎太一・臼杵美智代・杉浦邦雄

2. コンチェルト・レクイエム (1981年)

三木 稔 作曲

[二十絃箏独奏] 木村玲子
[笛] 西川浩平・竹井 誠
[尺八] I 藤崎重康 II石田忠史 III水谷雅康 IV添川浩史 V加藤秀和 VI米澤 浩
[太棹三味線] 田中悠美子 [琵琶] 田原順子 [胡弓] 飯嶋香保里 (助演)
[二十絃箏] 山田明美・城ヶ崎美保 [十七絃] 宮越圭子・大泉一美
[打楽器] 尾崎太一・臼杵美智代・杉浦邦雄
[指揮] 田村拓男

～休憩～

3. Lotus Poem 一尺八と邦楽器群のための

三木 稔 作曲

(日本音楽集団・アイオワ大学共同委嘱作品・日本初演)

[尺八独奏] 米澤 浩
[笛] 西川浩平 [尺八] 添川浩史
[細棹三味線] 簀田司郎 [太棹三味線] 田中悠美子 [琵琶] 田原順子
[箏] I山田明美 II城ヶ崎美保 [十七絃] 宮越圭子
[打楽器] 臼杵美智代・杉浦邦雄
[指揮] 田村拓男

4. 古代舞曲によるパラフレーズ (1966年)

三木 稔 作曲

[ソプラノ] 宇佐美瑠璃 (客演)
[笛] 西川浩平 [尺八] I藤崎重康・添川浩史 II米澤 浩・石田忠史
[細棹三味線] 簀田司郎 [太棹三味線] 田中悠美子 [琵琶] 田原順子
[箏] I木村玲子・山田明美 II熊沢栄利子・城ヶ崎美保
[十七絃] 宮越圭子・大泉一美
[打楽器] 尾崎太一・臼杵美智代
[指揮] 田村拓男

新千鳥の曲

原曲は箏（本手と替手）と尺八の合奏曲で、器楽のみの部分をはさんで、前後に「千鳥」を詠んだ和歌を歌詞とした歌があり、箏奏者の弾き語りによって歌われます。今回は、それらに笛、三味線、琵琶、十七絃を加え、歌のメロディーも管楽器に移して、純器楽合奏曲にしました。更に能管、小鼓、大鼓、締太鼓の四拍子による囃子を挿入して全体に、変化と緊張を付与しています。今回はコンサートの序曲の意味を持たせ短縮版を使用します。

コンチェルト・レクイエム

声楽を伴わない単一楽章で書かれたレクイエムです。特定の宗教儀式とはつながっていませんが、人が必ず迎える厳しい死を泣き、魂の鎮まることを願って作曲されました。死んだ人間が土に戻るという古い考えに従って石のビートがセレモニーを導きます。

二十絃箏は作曲者が最も力を入れて育ててきた楽器で、その上演様式として重要なコンチェルトに、レクイエムの内容を持たせることにより最も深い心の表明をしようとしたものです。

初演は1981年第64回定期演奏会、編成は、独奏二十絃箏、笛1または2、尺八3または6、琵琶、太棹三味線、胡弓、二十絃箏2、十七絃2、打楽器4（1人は指揮を兼ねる）、演奏時間は約20分です。

Lotus Poem 尺八と邦楽器群のための

蓮は極楽浄土に似合う。

第二次世界大戦から半世紀が経った。日米共、沢山の人が犠牲になった。当時少年ながら、あの地獄を体験した私から、その人たちを悼む気持ちがいつまでも離れない。この曲も、その追悼と永遠の平和願望に添っている。独奏尺八と邦楽器群の協奏曲だが、通常

のように互いに拮抗することはなく、慎み深く共存する。情緒的に言えば、蓮の台を訪れた尺八が、時間のない時を過ごし、ほのかな夢を共にして去っていく、というような構図を思っ書いて。

アイオワ大学と日本音楽集団の共同委嘱を受けて作曲し、1994年10月17日、日本音楽集団アメリカ公演の途次、アイオワ・シティの Virgil M. Hancher Auditorium で初演。楽器編成は、笛、尺八、細棹三味線、琵琶、二十絃箏2、十七絃、打楽器2と独奏尺八。演奏時間は約20分。（作曲者）

古代舞曲によるパラフレーズ

日本民族の古代の荒々しさ、熱さ、衝動の中にこそ真に現代に通じる若々しい、多彩な音楽性がありうるのだという作曲者の信念の溢れた大作で現代邦楽の一時期を画した作品です。〈前奏曲〉は器楽的な構成美を持ち、〈相聞〉は万葉の恋歌の現代的表現、〈田舞〉は大胆なリズムをもったスケルツォ、〈誄歌〉は慟哭がそのまま音楽になった葬祭の歌、〈姫歌(かがい)〉では人間の本能を謳歌する祭と、その去来のさまが画かれるという五楽章からなっています。

NHKの委嘱により1965～66年に作曲、66年に初録音、第四回定期演奏会で舞台初演されました。楽器編成は笛、尺八2、三味線、琵琶、箏2、十七絃、打楽器2、ソプラノ・ヴォカリーズ、演奏時間は約27分です。

今日11月17日は日本音楽集団第一回定期演奏会からちょうど30年目の記念すべき日にあたる。そのメモリアル・デーに、私の初期のいわば出世作と、集団興隆期に最も激しい社会事情を体験した協奏曲の11年振りの国内上演、そして最新作の日本初演を行うことができると、いうにいわれぬ感慨を覚えます。

(三木 稔)

客演者プロフィール

宇佐美瑠璃 (ソプラノ)

芸大および大学院を卒業後、ミラノに8年間留学。シチリアのベルリーニ国際音楽コンクールで入賞した他、ミラノで「蝶々夫人」のタイトルロール、ラジオ

・メギーナで「オテロ」「トスカ」の主演を演じ好評を博した。国内でも「皇帝ティトの慈悲」「椿姫」「ファウスト」「フィガロの結婚」等の主役を演じ高い評価を得、特に92年「ワカヒメ」初演のタイトルロールは絶賛された。

ニューヨーク・フィルとの《急の曲》

三 木 稔

《急の曲》は決して易しい曲ではない。しかも36分の大曲だが、81年の世界初演はCDの記録どおり完璧に近い演奏であった。しかし以後の演奏でそれを超える感動を私自身体験しないので、作品上に問題があるのでは、と自分を疑ってきた。しかし今回のマズア氏の練習と本番でこの作品への自信を回復し、あわせて、作品を読む大指揮者の姿を久しぶりに堪能することができた。マズア氏にとってはあくまでも作品が原点であり、彼はスコアから生の躍動感を取り出すことができる稀な指揮者の一人なのであった。

じつは私が出発する一週間前に、このツアーのマネージャーであるアーロン事務所から「マズア氏が病気だ。代わりに振れないかとニューヨーク・フィルから聞かれている」というFAXが来た。数日後マズア氏本人から別件で電話が入り、「元気なんですか？」と聞いたら怪訝な様子だったので誤報と判ったが、余人では決して今回のような感動は生み出せなかったであろう。

さて集団を交えてのリハーサルが始まった。ニューヨーク・フィルの本拠であるエヴェリー・フィッシャー・ホールは、メトロポリタン・オペラ・ハウス及びシティー・オペラとコの字型に広場を囲んでリンカーン・センターの中核をなしている。ジョン・レノンが「世界の中心」と考えたここへ、主演の一人として大手を振って出入りすることに、集団の誰も気分の悪からうはずはない。ただエヴェリー・フィッシャーは当初音響に問題があり、マズア着任後巨費をかけて改善したことも知られている。それでもゲヴァントハウスでの世界初演のように集団が舞台奥のひな壇に位置すると一階席から見にくくなるため、マズア氏と私は相談して最前列にずらりと並んでもらうことにした。その場所で演奏すると、オケの弦が指揮のポイントから遅れて聞こえる問題に直面することになる。初日はそれに慣れ切れぬまま本番を迎え、不安の中での緊張した演奏となった。しかし聴衆はこの「未知との遭遇」を楽しんだ模様で、前半での演奏なのに、呼ばれて私が舞台に出た時、方々にスタンディング・オベーションで迎えてくれる聴衆の姿を神々しく見た。

二日目はどこでも誰でもそうだが、技術的によりよくなった反面パッションが収まって、演奏も聴衆もや

や平静だった。三日目の朝、ホテル一階の連絡板にニューヨーク・タイムズの批評が切り取って貼り出されていた。演奏がうまくいって聴衆の反応があれほどよくても、「Symphony for Two Worlds」という大胆なタイトルや日本人への反発もあって、批評がシビアになるのではないかと心配をしていたので、この全面賛辞に面食らい、その後多くの識者からおめでとうと言われるまで肩に唾をつけていた。この日は土曜日で、2時から話題の「ヤングピープルズ・コンサート」。それに先立つ12時45分頃から、ロビーの8ヶ所のステーションに各楽器が分かれて、訪れる親子連れの「プロムナード」に1時間のサービス。全員演奏に、説明に、サインにおおわらわ。でも皆気分よく応接していた。2時からのコンサートでは、聴衆だけでなくニューヨーク・フィル全員が演奏位置で聞き入っている前で、《嬉歌》そしてバッハの《ロンド》を単独で演奏したが、そのプレッシャーは大変だったろう。さらにマズア氏の注文で《ペーターと狼》の各テーマを先ずオケが正規の演奏をして集団が反復することになった。プロコフィエフがオケの各楽器紹介用に腕によりをかけて書いた、まことにツポにはまったモチーフを邦楽器がともに真似して上をいけるはずはない。「ここはユーモアか洒落しかない。ひとつ頼むよ」と担当の西川君(笛)に言ったら、「皆そのノリでやっているですよ」との返事。いざ始まったら面白いのなんの、オケの人たちも笑い転げるほどのズッコケた演奏をしてくれた。これは後日にでたニューヨーク・タイムズの、このコンサートを特定したアレックス・ロス氏の批評でも激賞された。狼を演じた尺八群には身の毛がよだつたそうだ。おかげで司会役のマズア氏や私の英語の欠陥がカバーされてお釣がきた。「ヤングピープルズ・コンサート」だけでなく、8時からの正規の公演の前にも毎夜7時から25分のレクチャー・デモンストレーションがあり、それは台本を作っとうまくしゃべり、質問にも上手に対応できてお答めを頂いたくらいだが、昼間の子供たちはずらりと質問に並び、次々とまことに意表を突く発想で、通訳をとおしてもなかなか正解が難しい。子供は凄い。

その夜の《急の曲》は素晴らしかった。問題と思っていた第四楽章はいままで25回の上演の中で最高だっ

第21次海外公演(アメリカ)

■公演日・場所・プログラム

10月6日～8日 ニューヨーク

Avery Fisher Hall (Lincoln Center)

ニューヨークフィル定期演奏会出演

急の曲／三木稔作曲

(指揮―クルト・マズア)

10月8日午後2時 ニューヨーク

ニューヨークフィル Young Peoples Concert

〈雄歌〉〈ロンド〉〈急の曲〉第四楽章

10月9日 ニューヨーク

コロムビア大学 Miller Theater

1. 新八千代獅子／日本音楽集団編曲

2. 颯踏／長沢勝俊作曲

西川浩平・臼杵美智代・杉浦邦雄

3. コンチェルト・レクイエム／三木作曲

二十絃独奏―木村玲子

4. 鹿の遠音／古典

坂田誠山・米澤浩・添川浩史・石田忠史

5. 古代舞曲によるパラフレーズ―三木作曲

ソプラノ―宇佐美瑠璃(以下同じ)

10月12日～14日 フィラデルフィアで学校

公演

12日 Cedar Cliff High School

13日 Wissahickon High School (二回)

14日 Great Valley High School (二回)

1. 踊る春／三木作曲

2. 楽器紹介

3. 古代舞曲によるパラフレーズ 抜粋

10月14日 フィラデルフィア一般公演

Great Valley High School

1. 新千鳥の曲／秋岸寛久・尾崎太一編曲

2. 颯踏／長沢作曲 西川・臼杵・杉浦

3. 火男／小橋稔作曲

4. わが心に春は今／三木作曲

ソプラノ(英語)―宇佐美

5. 風化II／金田潮兒作曲

琵琶独奏―田原順子

6. 魂振り／三木作曲

7. 秋の曲／三木作曲 米澤・山田明美

8. 古代舞曲によるパラフレーズ／三木作曲

10月15日 サン・アントニオ

Carver Cultural Center

1. 新千鳥の曲／秋岸・尾崎編曲

2. 燎原／秋岸作曲

十七絃独奏―宮越圭子

3. 火男／小橋作曲

4. わが心に春は今／三木作曲

5. 檜太鼓曲弾き／古典

太神独奏―田中悠美子

6. ニポポ／長沢作曲

7. 踊る春／三木作曲

8. 歌舞伎音楽より／古典

西川・簗田司郎・臼杵・杉浦

9. 古代舞曲によるパラフレーズ／三木作曲

10月16日 セントポール・パブリックラジオ

「セントポール・サンデー・モーニング」の

録音(全米二十局ネットの人氣番組)

1. 踊る春／三木作曲

2. 那須与一／古典 田原

3. 颯踏／長沢作曲 西川・臼杵・杉浦

4. 秋の曲／三木作曲 米澤・山田

5. 火男／小橋作曲

6. わが心に春は今／三木作曲

7. セントポールフルス／田中作曲・独奏

10月17日 アイオワ大学

Clapp Recital Hall

1. 新千鳥の曲／秋岸・尾崎編曲

2. 颯踏／長沢作曲 西川・臼杵・杉浦

3. Lotus Poem／三木作曲

(アイオワ大学・集団共同委嘱・初演)

尺八独奏―米澤

4. 那須与一／古典 琵琶―田原

5. 古代舞曲によるパラフレーズ／三木作曲

10月19日 スタンフォード大学

Dinkelspiel Auditorium

1. 新千鳥の曲／秋岸・尾崎編曲

2. 那須与一／古典 田原

3. 序の曲／三木作曲 添川・田中・宮越

Palo Alto Chamber Orch. と共演

4. 鹿の遠音／古典 米澤・添川

5. 古代舞曲によるパラフレーズ／三木作曲

指揮 10月9日～17日 田村拓男

10月19日 稲田 康

■参加者

音楽監督―三木稔

笛―西川浩平

尺八―坂田誠山・米澤浩・添川浩史・

石田忠史

三味線―簗田司郎・田中悠美子

琵琶―田原順子

箏―宮越圭子・木村玲子・山田明美・

城ヶ崎美保

打楽器―高橋明邦・臼杵美智代・杉浦邦雄

指揮―田村拓男・稲田康

声楽―宇佐美瑠璃

舞台スタッフ―渡辺烈・古川尚人

助成―国際交流基金(財)ロームミュージック

「世界中でやりましょうね」と言い合って別れた。

前記ロス氏は「《急の曲》は、二十世紀の芸術が聴衆とのコミュニケーションの上で超えられなかった壁を乗り越えた」と批評の中で書いている。集団が世界の音楽シーンに姿を現す手段として恰好の曲を残せたという実感を14年ぶりに味わえことができた。

た。終わりに近づき一旦緩やかになって、日本のすべての絃楽器がほぼユニゾンで歌い、他の楽器がからんで躍動を開始するくだり、マズア氏はそれを日本の夏祭りの踊りと考えたいと言い、そのとおりに生命感みなぎる演奏を引き出した。第三夜は特に訝え、当然聴衆も一番燃えた。多数のスタンディング・オベーションを受けて、マエストロと私はごったがえす舞台袖で

The New York Times

Copyright © 1994 The New York Times

NEW YORK, SATURDAY, OCTOBER 8, 1994

75 cents beyond the greater New York m



Pro Musica Nipponia in its debut with Kurt Masur and the New York Philharmonic Orchestra.

東西の出会いと結合

ニューヨーク・タイムス
1994年10月8日
ジェームス・R・オストライク

ニコライ・リムスキー・コルサコフは管弦楽法の本を書いている。しかし日本の作曲家三木稔と聞き比べた時、リムスキーはけちん坊(または臆病者=訳注:米俗語 p i k e r)に思えた。木曜の夜、エヴェリー・フィッシャー・ホールでのことだ。クルト・マズアは、西洋のフル・オーケストラと16人の日本楽器のアンサンブルを結び合わせた三木稔の「二つの世界のための交響曲(急の曲)」をニューヨーク・フィルに導き入れた。因みに日本音楽集団は1964年に三木氏たちによって創立されている。

1981年、マズアのもう一つのオーケストラであるライブチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の二百年記念に委嘱されたこの交響曲で、三木氏は厳格に西洋の交響曲の伝統を踏まえて東西の橋をかけようとした。とはいっても、より多数で、より滑らかな西洋楽器群が、三木氏によって精緻に書き込まれたスコアの中で、誠に素晴らしい機能しているのに対して、少数で古い日本楽器群は、結局は少々色を添えるにすぎないかもしれないのに、(彼は)正面から立ち向かわせるようにした。

しかし、彼らは多くの色を加えた。また、三木氏は用心深くその手法を開発した。例えば、しゃがれた音色を持った、リコーダーのような尺八の長いメロディーに、さえざるような西洋のフルート(の音型)を対置するといった組み合わせもよく使われている。だが希な組み合わせもある。例えば箏のデリケートな撥音がブラスと併置される効果は、プロコフィエフの「ロミオとジュリエット」に滑稽なマンドリンとトランペットの先例があるにしても、めざましく独創的である。

日本のものであれ、西洋のものであれ、ほとんどすべての楽器が全曲中どこかで素晴らしい音を発揮できるようになっている。だが、この作品が最高の歓喜にわれわれを導くところは、新たな精巧さで仕掛けられたすべての楽器が、同時に響き合っている、あらゆる方向に火花を散らして轟進する時だ。三木氏の、東西を象徴する二つのテーマ音型の巧みな変容は、全曲にわたる統合を保証しているのである。

中略(公演で併演された「シェヘラザード」について)

デイヴィッド・ライトがプログラム・ノートで適切に述べているように、「シェヘラザード」のしなやかなオリエンタリズムは、三木氏の異文化交配が今成し遂げていると同様な「未知への遭遇」をかつての聴衆にもたらした。

中略(「シェヘラザード」の演奏について)

三木氏は、コンサートの前の日本音楽集団団員たちによる日本楽器の簡単な紹介を司会した。それぞれの曲の断片を聞かせてくれて有用であったが、聞き手としては、これらの素晴らしい熟達した演奏家たちの一人あるいは何人かの、より完全な音楽的ステイトメントを求めたくなってしまう。とくに田原順子の琵琶(シタル)のような響きのするリコーダー)の感動的な中世物語の詠唱を伴った演奏は、もっと長くやられるべきだった。

「二つの世界のための交響曲」はエヴェリー・フィッシャー・ホールのニューヨーク・フィルの青少年コンサートで今日の午後10時に部分演奏された上、夜には全曲が三度目の上演をされる。日本音楽集団は明日、コロムビア大学のミラー劇場で、より多くの三木作品を演奏する。

MUSIC REVIEW

East and West Meeting and Mixing

By JAMES R. OESTREICH

Nikolai Rimsky-Korsakov wrote the book on orchestration, but alongside the Japanese composer Minoru Miki in the New York Philharmonic concert at Avery Fisher Hall on Thursday evening, Rimsky seemed a piker. Kurt Masur led the orchestra in Mr. Miki's "Symphony for Two Worlds," which combines a full Western orchestra with a 16-member band playing Japanese instruments: here, Pro Musica Nipponia, founded by Mr. Miki in 1964.

In this symphony, which was commissioned by Mr. Masur's other orchestra, the Leipzig Gewandhaus, for its 200th anniversary in 1981, Mr. Miki seeks to build bridges but works squarely within the Western symphonic tradition. Although the Japanese instruments, few and mostly ancient, stand up to the larger, sleeker ensemble remarkably well in Mr. Miki's exquisitely gauged scoring, in the end they add little more than color.

But they add lots of it, and Mr. Miki exploits it cannily. Some combinations are obvious (long lines on hoarse, recorderlike shakuhachis against sweet warblings on Western flutes), others less so. The juxtaposition of delicate, plucked kotos with brasses is strikingly original despite Prokofiev's zany mandolin-trumpet precedent in "Romeo and Juliet."

Virtually every instrument, Japanese and Western, gains prominence at some point or other, but the piece is most delightful when the whole elaborate contraption chugs along at once, sending sparks in every direction. Mr. Miki's deft transformation of Eastern- and Western-sounding themes insures overall unity.

Although Rimsky-Korsakov's "Scheherazade" has never really dropped from sight, it has mercifully seemed less than ubiquitous over the last decade, and it is almost possible

to hear the work with fresh ears, at least in a fresh performance like Mr. Masur's. As David Wright aptly observes in the program notes, the work's sinuous orientalism afforded early audiences "an encounter with the unknown," as Mr. Miki's cultural cross-fertilization does now.

Mr. Masur, perhaps identifying more with the gruff sultan of Rimsky's program than with the tale-spinning Scheherazade, avoided the typical saccharine approach to this music, giving full vent to its dynamism. Glenn Dicterow, the concertmaster, played the extensive violin solos beautifully, and the woodwind principals were fine in their solos, especially Judith LeClair, the bassoonist and chief beneficiary of Rimsky's imaginative scoring.

Some string chattering was blurred, and a few tempo shifts seemed unsettled. What's more, it became clear in several piano and pianissimo passages that even three

years into the Masur era, quiet playing does not come naturally to this orchestra and must to some extent be imposed.

Mr. Miki presided over a brief preconcert demonstration of the Japanese instruments by members of Pro Musica. As useful as the snippets were, a listener could not help wishing for a more complete musical statement from one or several of these superbly skilled performers. Junko Tahara, in particular, played the biwa (a lute with a sitarlike sonority) while intoning a compelling medieval selection that should have gone on longer.

The "Symphony for Two Worlds" is to form the basis for a Philharmonic Young People's Concert this afternoon at Avery Fisher Hall, and the entire program will be repeated this evening. Pro Musica Nipponia is to perform more of Mr. Miki's music tomorrow at the Miller Theater or the campus of Columbia University

FILM FESTIVAL REVIEW

A Seven-Hour Contemplati

By JANET MASLIN

Brave souls in tomorrow's sold-out audience for "Satantango" will have ample opportunity to ponder the meaning of a seven-hour running time. Is this a declaration of greatness, or simply a means of crushing viewers into submission? Do the thoughts stirred by such an uncompromisingly long film fully occupy all the ruminative space they have been given? Is time somehow altered when, thanks to the hypnotic effects of Bela Tarr's deliberately lulling direction, time is made to stand almost still?

"Satantango," Mr. Tarr's bleak,

imposing cinematic experiment, sometimes lives up to great expectations, but its unevenness allows many questions to creep in. Moving at a pace that would suit a glacier, Mr. Tarr contemplates a group of grim-faced, wretched characters whose agricultural collective has fallen into decay, and who engage in desperate forms of chicanery as a way of denying their failure.

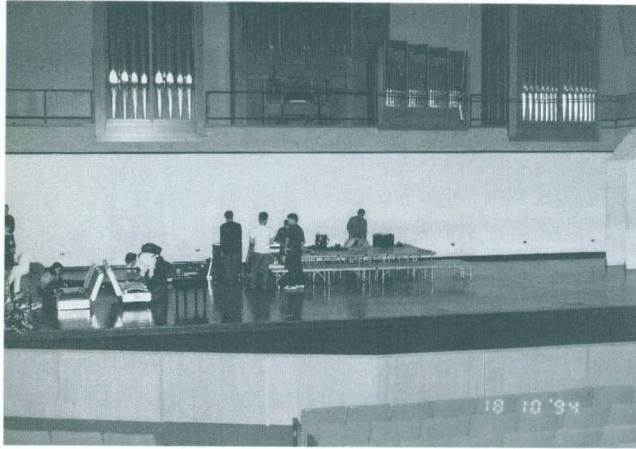
In this remote, unnamed outpost and in a nearby town, characters cheat, betray and spy on each other. They also prepare to be relocated as their communal life comes to an end. "Don't take me as a liberator," one



①



④



②



⑤



③

アメリカではホール内にカメラを持ち込めないことが多く、ニューヨーク・フィルと共演中の写真が撮れなかったことは残念です。ニューヨーク・フィル専属カメラマンから送付約束の写真も届かず、これも残念！



⑥

第21次海外公演（アメリカ）スナップより

- ① Cedar Cliff High School (フィラデルフィア) の広い施設
- ② アイオワ大学クラブリサイタルホール
- ③ セダー・ラビッツ空港からの大型バス
- ④～⑥ ミネアポリス・パブリック・ラジオ・スタジオで「セントポール・サンデー・モーニング」の収録スナップ
ビンザサラを手にするウィリアム・マックグラウフリン氏(⑥の中央)

アメリカ公演旅行—私の日記から

宮越 圭子

ニューヨークへは10月4日入り。5日はニューヨークフィルとの「急の曲」の初お手合わせ。今までに20回を超える多くのオケとの経験がそうさせるのか集団の面々は緊張の中にも自信に満ちた対応振りが頼もしい。クルト・マズア氏は随所で日本的な歌い方をオケのメンバーに迫る。当初は戸惑い気味のオケも本番を迎える頃には出来上がっていくのはさすが。

6、7、8日の三日間、エヴェリー・フィッシャー・ホールは満員の聴衆（2400のキャパ）で埋まり、最初の曲「急の曲」が終わった時点で毎夜の長いスタンディング・オヴェイション。8日のニューヨーク・タイムズには減多に褒めないことで有名なオストライク氏が絶賛の記事を載せたというのでちょっとした騒ぎ。三日間とも本番前の7時から25分間、日本の楽器の紹介を兼ねたソロのデモンストレーション。他のメンバーも少々緊張気味に見える。毎回7～800名の熱心なお客様で、進行役の三木稔氏と通訳のサラ嬢は質問攻めで大わらわ。

8日のお昼には、子供たちのためのプロムナード・コンサートに引き続きステージ上でニューヨーク・フィルとも合同でヤング・ピューピルズ・コンサート。「ピーターと狼」のテーマ音楽東西両楽器の競演(?)はオケ・メンバーやお客様にも大受け。集団メンバーの発想は抜群！ ニューヨーク・タイムズもこの企画の素晴らしさを強調。そんな訳で三日間の内に8回のステージ。お客様には喜んでもらえたようで苦勞のし甲斐あり。

翌9日はコロンビア大学で単独公演。「新八千代獅子」「コンチェルト・レクイエム」「古代舞曲によるパラフレズ」といったプロに大学街の知識層たちが聴き入る。演奏後のレセプションにはアデレード・フェス芸術総監督クリストファー・ハント氏や作曲家デーヴィド・ローブ氏の顔も…。

8日間宿泊したニューヨークのミルバーンホテルが自炊式だったのは楽しかった。近くのスーパーで毎日安くておいしい食料品の買い出しを楽しみ、つい食べ残すことが多かったが、束の間の独身暮らしを楽しんでしまった。

ニューヨークの次はフィラデルフィア。ホテルコンフォート・インの辺りは自然の豊かなところ。あっ、歩道や歩行者用信号が無い？。人間通行禁止の立て札が…ああ…。車の切れ目を見計らってみんなで疾走！、大手町のカルがもどころではない命がけ。もう一つ大問題発生！…フィラデルフィアでは飲酒禁止？。夕食

時にレストランではビールが飲めない!?…男性陣（若干の女性陣も）は苦勞をいとわず酒を求めて奔走。年齢証明？本数制限？…やってられないやあ！…タクシーを飛ばしてやっと求めたビールや酒類をみんなで飲む味はまた格別！ 毎晩、某三味線氏の部屋がバー代わりになった。フィラデルフィアでは三日間、ハイスクールでの学校公演。広い敷地にゆったり建つ校舎、パソコンや手工芸、陶芸といった教室も見える。服装や髪形も各自思いの学生たちが一クラスに十数人。体育の時間にゴルフのレッスンをしていたのには驚いた。昼食時に弦楽オーケストラで歓迎してくれたり、集団の演奏を熱心に聴いていた姿が忘れられない。学校公演5回、一般公演1回をこなして次はサンアントニオへ…。朝5時出発、飛行機を二度乗り継いで夜本番。田中悠美子さんの太棹の曲弾きがすごかった！ 様々なテクニックを駆使した上に、バチを投げ上げて落ちてくるのを見事に受け止めてまた弾き始める…、舞台袖からは「いよっ悠美子！」「テキサスー！」「誰にも出来ない！」などと掛け声がかかり、日系米人らに大受け。

翌日また飛行機を乗り継いでセントポールへ。休む間もなく夕方からパブリックラジオスタジオでアメリカ全土向けクラシック音楽番組では人気No.1という「セントポール・サンデー・モーニング」番組のための収録。カンサスシティーシンフォニーの指揮者ウィリアム・マックグラウフリン氏がインタヴューを交えながら中味の濃い司会進行で1時間半をまとめる。

17日、上空から広大な田んぼを見ながらセダー・ラピッズ空港に降り立った。バスでアイオワ・シティへ。大学街ではアイオワ大学・日本音楽集団共同委嘱作品「ロータス・ポエム」を初演した。パイプオルガン以外に何の飾りもないホールだが良く響く。尺八ソロの米澤氏も緊張の中、熱演。

最後の公演地は、サンフランシスコから近いスタンフォード。この日のために日本から駆付けした稲田康氏の指揮でパロ・アルト・チェンバーオケと「序の曲」（三木稔作曲）を共演。中学・高校・大学生よりなる14名の弦楽オケは反応がストレートでさわやか。慣れない現代作品を前に、練習を重ねる度にグレードアップ。終演後のレセプションでは多くのお客様からサインなどを求められた。

今回のツアーがハードスケジュールであったにもかかわらず、メンバーが揃って全力投球したことは私にとっても幸せなことでした。

日本音楽集団の主な活動記録 (1994年6月)

1994年

- 6月6日(月)～10日(金) 長崎県学校巡回公演
- 6月12日(日) 奈良親子劇場 生駒中央公民館
- 6月14日(火) 横浜市立南台小学校音楽鑑賞会
- 6月16日(木) '94音楽フェスティバル in 東京—日本音楽集団コンサート (みなみ板橋おやこ劇場)
成増アクトホール
- 6月18日(土) 江南楽友協会ぱーぶるコンサート (愛知県) 江南市民文化会館
- 6月20日(日)～27日(火) 「オーケストラ・アジア」創立記念演奏会
23日(木) ソウル公演・ソウル音楽堂/26日(日) 徳島公演・市立文化センター/
27日(日) 岡山公演・シンフォニーホール
- 6月26日(日) '94音楽フェスティバル in 東京—日本音楽集団コンサート (きたく子ども劇場)
北とぴあ・つつじホール
- 7月5日(火) 第134回定期演奏会—真夏の夜へのプロローグ バリオホール
- 7月7日(木) 中新田町学校公演 (宮城県) バッハホール
- 7月8日(金)～11日(月) 中国地方おやこ劇場
8日(金) 児島文化センター/9日(土) 竹原市民会館/10日(日) 東広島市中央公民館
- 7月13日(水)～14日(木) 北信越子ども劇場
13日(水) 小松市民センター/14日(木) 七尾サンライフプラザ
- 7月30日(金) NHK教育テレビ芸能花舞台に出演
- 8月2日(火)～3日(水) 長沢勝俊作品CD録音 日野市民会館
- 8月30日(火)～9月1日(木) 佐久音楽鑑賞会
- 9月8日(木) 第135回定期演奏会—アジアへの郷愁 津田ホール
- 9月27日(火) 横浜市立犬山小学校鑑賞会
- 10月4日(火)～21日(金) 第21次海外公演 (アメリカ) —詳細本誌参照
- 10月16日(日) 八日市場市公演—飯高檀林コンサート (千葉県) 飯高寺
- 10月23日(日) 三重県国民文化祭に出演 三重県総合文化センター
- 10月28日(金) 豊橋おやこ劇場 豊橋市民文化会館
- 11月1日(火) 東京女学館音楽鑑賞会 渋谷公会堂
- 11月4日(金) 横浜市立大岡小学校鑑賞会
- 11月6日(日) 大野町音楽に親しむ会 (岐阜県) 大野町総合町民センター
- 11月16日(水)・17日(木) 第136回定期・連続定期演奏会—創立30周年記念・秋の総合定期 津田ホール

- 11月18日(金) 大垣市立南中学校音楽鑑賞会
- 11月27日(日) 尾北おやこ劇場 江南市民会館
- 12月16日(金) 山梨巨摩子ども劇場 白根桃源文化会館
- 12月17日(土) 東村山子ども劇場 東村山中央公民館ホール
- 12月22日(日) 八王子子ども劇場 八王子市芸術文化会館
- 1995年
- 1月19日(木)/20日(金) 北信越子ども劇場 金沢市文教会館
- 1月22日(日) 芳賀町公演 (栃木県) 芳賀町民会館
- 1月27日(金) 第137回定期演奏会—第6回邦楽器の祭典 (共催=(社)日本作曲家協議会) 津田ホール
- 2月5日(日) 日本音楽集団演奏会 愛媛生涯学習センター
- 2月10日(金) 関市中学校音楽鑑賞会 関市文化会館
- 3月2日(木) 竹取物語～日本の調べと語りへのせ かつしかシンフォニーヒルズ
- 3月4日(土) 第3回戸塚区芸術鑑賞事業「日本音楽集団演奏会」 東戸塚教育センターホール
- 3月19日(日) 倉敷音楽祭に参加 倉敷芸術文化会館

日本音楽集団今後の主な活動 (1995年3月まで)

好評発売中

長沢勝俊作品集待望のCD化 4枚シリーズ同時発売

組曲「人形風土記」

子供のための組曲

☆新録音☆

制作：BMGビクター

- I 組曲「人形風土記」／子供のための組曲／冬の一日
- II 大津絵幻想／詩曲／箏四重奏曲／萌春／二つの舞曲
- III まゆだまのうた／三味線協奏曲／颯踏／虹の輪
- IV 春三題／尺八協奏曲／錦木によせて／飛驒によせる三つのバラード

価格：各2,500円

二十絃箏

箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims

(株)アイ・エム・エス ●楽器リース ●保管 ●移動 ●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-3-4

ゆうてんビル

PHONE. 03-3397-2292

FAX. 03-3397-7728